

上位頸椎疾患・外傷の病態と治療

今日の脊椎脊髄外科領域は著しく発展し、特に本邦は頸椎疾患と外傷の病態・診断・治療のいずれにおいても歴史的にみて国際的に多大な貢献をしてきた。その背景には、アジア人に頸部脊柱管狭窄症や後縦靱帯骨化症が多いこと、リウマチ性脊椎炎や透析性（破壊性）脊椎炎の研究が進んでいたこと、CTなどの画像診断機器が多いこと、脊椎外科医師の創造力が豊かで、かつ診断能力やスキルが高いことなどが考えられる。頸椎椎弓形成術の開発、頸椎椎弓根スクリューの開発、後縦靱帯骨化症に対する治療戦略の確立や遺伝子探索などは、代表的な輝かしい功績である。一方、医療の発展と時代の流れと共に、疾患の種類や治療法も著しく変化している。

今回、上位頸椎疾患・外傷の病態と治療における新たな知見と知識の整理を目的に、実臨床で遭遇することが多い疾患・外傷について特集を組ませていただいた。代表的疾患・外傷の全10項目に造詣の深い先生方にご執筆を依頼し、上位頸椎損傷（加藤裕幸先生ほか）、頸椎歯突起骨折（北村和也先生ほか）、頭蓋頸椎移行部・上位頸椎不安定症（根尾昌志先生ほか）、軸椎歯突起後方偽腫瘍（飯塚陽一先生ほか）、頭蓋底陥入症（高畑雅彦先生ほか）、上位頸椎高位の後縦靱帯骨化症（吉井俊貴先生ほか）、頭蓋頸椎移行部不安定症（山崎正志先生ほか）、環軸関節回旋位固定（磯貝宜広先生ほか）、筋性斜頸（船尾陽生先生ほか）、頸椎の脊髄腫瘍（名越慈人先生ほか）についての素晴らしい特集号が完成した。いずれも先生方の豊富なお経験に基づく内容であり、まさに力作である。本特集は、若手医師のみならず脊椎脊髄専門医にとっても大変勉強となる内容であり、明日からの日常診療と教育現場で大いに役立つものと確信している。

（石井 賢）